# ●東日本大震災　復興支援活動

## はじめに

龍谷大学では、2011年３月11日に発生した東日本大震災の復興支援のために2013年度も様々な取り組みを実施しました。

本学では、復興支援活動を大学として総合的に検討する必要があると判断し、発災直後の2011年４月に危機対策本部のもとに「学生ボランティア等の被災者・被災地支援活動検討プロジェクトチーム」を設置し、現在も継続的にプロジェクト会議を実施しています。

ボランティア・NPO活動センターでは、通常業務を行いながら、プロジェクトの事務局として震災復興支援関連事業の実施に携わっています。この項では、2013年度にボランティア・NPO活動センターが関った復興支援の取り組みについてまとめました。詳しくは、次項からの各報告をご一読ください。

各報告の前に、これまでの現地での復興支援活動の実績と赤松学長からのメッセージ（2013年３月11日）を紹介します。

### これまでの現地での復興支援活動（ボランティアバス）

■2011年度

- ６月24日（金）～27日（月）
  第１回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市大街道地区、中里地区】
- ７月２日（土）～７月５日（木）
  第２回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市旭町、宮城郡七ヶ浜町】
- ８月４日（木）～８月10日（水）
  第３回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市牡鹿町、宮城郡七ヶ浜町】
- 11月11（金）～14日（月）
  第４回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】
- 12月２日（金）～12月５日（月）
  第５回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区、宮城郡七ヶ浜町】

■2012年度

- ９月13（木）～16日（日）
  第１回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】
- 11月16日（金）～11月19日（月）
  第２回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】

■2013年度

- ８月12（月）～16日（金）
  第１回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】
- ９月27日（金）～９月30日（月）
  第２回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】
- 11月15日（金）～11月18日（月）
  第３回東日本大震災復興支援ボランティア
  【宮城県石巻市雄勝地区】

# 学長メッセージ　－東日本大震災三年目をむかえて－

東日本大震災から３年目をむかえました。犠牲となられた１万７千人を超す一人ひとり、ご家族に心から哀悼の意を表するとともに、避難を余儀なくされ、故郷から遠く離れ厳しい生活をおくられている皆さまにお見舞い申しあげます。１日も早く平穏な生活が戻りますことを念じております。また、今もって行方不明の皆さまの捜索、被災者の生活支援、インフラ整備などに取り組んでおられるすべての皆さまのご尽力に心から敬意を表します。本学では、大震災後復興のための取り組みについて長期的活動を視野に入れつつ不断の実践と対話を重ねてまいりました。被災地から学生へ寄せられる期待は大きく、学生の主体的な活動を支援しながらの試行錯誤の３年間でありました。結果として300人を超す学生、教職員が現地に赴き、多彩な活動を展開することとなりました。

彼らは被災の現場に立ち、被災した多くの皆さまとの交流・対話によって、メディア情報だけでは伝わらない、言葉にすることができない真実があることを学びました。たとえば子を失った親、親を失った子、家族の離散など、こうした人たちのつらく悲しい、痛ましい困難な事態を目の当たりにして、そこにわが身を「重ね描く」ことによって、遠く離れた京都での日常生活の中では感じることのない深い思い、人の痛みが解る豊かな人間性が育てられています。当事者にはなれないものの、そこに思いをはせ、「重ね描く」営みは、今私たちがそれぞれの場所で家族や、親子という関係を改めて見つめなおす大きな機縁になっているのです。

私たちは、建学の精神、浄土真宗のみ教えである阿弥陀仏のはたらきの中で、お互いがいのち恵まれた存在であり、いのちの連帯性、「同朋」であるということに気づき、そのことの価値をカジノ資本主義が跋扈し、「豊かさの中の貧困・格差」が顕在化し、底なしの欲望が膨張する現代社会に向かって積極的に発信する社会的責任を有しており、その伝統を継承していくことに大きな意味があると考えています。

３月11日の東京電力福島原発の事故は、豊かな戦後を歩んできた日本社会の効率、利便追求のあり方、過剰な電力消費の生活や広告照明のあり方、地球温暖化や環境破壊などをもたらす暮らしのあり方、安全神話に覆われていた放射性物質を使用する核エネルギーへの依存など日本のみならず世界に対しても近代的文明観を見直すきっかけとなりました。この大きな問題を前に、私たちはこの課題を直視して、解決への新たな方向への一歩を踏み出せているかと忸怩たる思いを抱いて自問しています。しかし、たとえ今は闇の中で解決しうる道が見いだせなくても、じっくりと考え、他の方々の意見を聞き、先人の歩みを学ぶ中で、本質を問い繰り返し学び続けていく姿勢こそが、龍谷大学の伝統ある歩みではないかと思います。

私たちはいのちを輝かしめたいとの南無阿弥陀仏のお心を受けとめ、取り組むべき課題に真摯に全力投球をしていく。そして、多くの皆さまと対話を重ね、粘り強く信頼関係をつくりながら、今後も復興支援活動に取り組んでいきたいと考えています。どうぞ、皆さまのご支援とご協力を賜りますようお願い申しあげます。

2013年３月11日

龍谷大学学長　赤松 徹眞

| 企 画 名 | 東日本大震災　被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金 |
|---|---|
| 実 施 日 | 2013年４月16日（火）、６月10日（月）、12月10日（火） |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター |
| 参加人数 | 文学部教授会（斯文会）、教職員給与天引き：48名（６月分）、50名（12月分） |

■経緯・目的

東日本大震災発災直後から、龍谷大学として募金活動やボランティアバスの運行など、様々な形で復興支援に取り組んできました。発災から３年目を迎え被災地への関心の低下が問題視されていますが、本学ではボランティアを希望する学生が多数センターを訪れるなど、まだまだ関心が高いと感じています。

関心があってもすべての人が被災地で支援活動をすることはできません。その思いの受け皿として、2012年12月期末手当より2013年12月期末手当までの３期にわたって、「東日本大震災被災地でボランティア活動を行う学生に対する支援金」を募集して教職員の皆様より多くの支援金をいただきました。他にも、多くの教職員の皆様から、支援金をいただいております。

学生の成長を思うからこその支援金です。託された思いを受け、これから先もチーム龍大として一丸となり、中身の濃い活動プログラムを実行していけるよう努力を続けます。

■概　　要

・2012年度教職員等からの支援金

① 募金箱に寄せられた支援金　447,623円

② 賞与引き落としでの支援金
（2012年12月期末手当）　1,345,000円

③ 親和会からの支援金　500,000円

④ 校友会からの支援金　500,000円

合　計　2,792,623円

・2013年度教職員からの支援金

① 文学部教授会（斯文会）からの支援金
500,000円

② 賞与引き落としでの支援金
（2013年６月期末手当）　800,000円
（2013年12月期末手当）　950,000円

合　計　2,250,000円

・教職員等から頂いた支援金をこれまでに支出した額は、2012年度328,192円、2013年度765,795円の計1,093,987円でした。2012、2013年度の支援金総額5,042,623円の内、未執行額3,948,636円は2014年度以降の活動支援金として繰り越すこととしました。

---

| 企 画 名 | 第１回　東日本大震災　第１回　復興支援ボランティア |
|---|---|
| 実施日／場所 | ボランティア：2013年８月12日（月）～16日（金）４泊５日　宮城県石巻市<br>報告会（第１回、第２回合同）：2013年10月10日（木）17時30分～19時00分<br>深草キャンパス　21号館101教室 |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター |
| 参加人数 | ボランティア：合計32名（学生30名／引率２名）<br>報告会：約50名（第２回と合同） |

■経緯・目的

本学では2011年６月より毎年、宮城県にボランティアバスを運行し、その活動について報告会を実施するなど、学内で復興支援活動ついての啓もう活動を続けています。その効果もあり、ボランティアを希望する学生は年々増えているという状況です。

この度の活動は、発災から２年を経ているということもあり、緊急度の高い活動が求められているわけではありません。そこで、４月に筒井センター長と石川次長、竹田コーディネーターが発災以来、ご縁のある宮城県石巻市雄勝を訪ねて、活動内容は変化しているが、ニーズがあるということが確認できたので、今年度も復興支援ボランティアを実施することになりました。

地元の方と相談した結果、第１回目は、お盆に実施される『雄勝灯籠流し』の支援に決定し

ました。この行事は、震災前から行われており、地域の各家庭で３基の灯籠を作って持ち寄って2000基近くの灯籠を流していたそうです。しかし震災以後、人口が激減したこの地域では、従来スタイルでこの行事を維持することが困難になってしまっているという現状があったため支援を行うことにしました。

このプログラムの実施にあたり、参加学生が地元の方や支援のプロから話を聴く機会を設け、一見しただけではわかりづらくなってきている『震災』を感じ、『自分は何が出来るのか』を考え、『参加学生も復興の当事者である』ことを自覚できるようなることを目的にプログラムを組み立てました。

■概　　要

参加者募集にあたっては学生・教職員に対し、深草・瀬田・大宮の全キャンパスでコーディネーターが第１・２回分の復興支援活動ボランティアについて募集説明会を実施し、活動趣旨・リスクを十分に理解した上で参加するように呼びかけました。

説明会への参加者は全キャンパスで200名を超えていました。個別に応募したいと来室する学生もいましたが、説明会への参加を応募の必須条件にしていたので、そういった学生には、次回への応募を促しました。実際に願書を提出したのは108名であり、第１回を希望したのは、第一希望だけでも62名でした。

宿泊などの関係上、定員を増やすことができないこともあり、苦渋の選択でしたが選考を実施し、定員の30名を選抜しました。参加確定者に別途説明会を実施し、確定しているスケジュールの説明と、活動に関する質疑応答、必要書類・参加費の回収、参加者の自己紹介を行いました。

※提出物：参加申込書、活動誓約書・保証人同意書

※参加費：２万円

復興支援活動

●活動スケジュール

【１日目】

８時に深草キャンパス（京都駅集合は８時15分）を出発し、休憩を挟みながら21時過ぎに宮城県石巻市内にある石巻サンプラザホテルに到着し、各自部屋にわかれて宿泊。

※バスの中で仲間作りのために、自己紹介や『東北を知ろう』クイズなどのレクリエーションを実施すると共に、活動スケジュールなどもバスの中で案内しました。

【２日目】

９時に雄勝の店こ屋街前に到着し、地元の方から灯籠の作り方を学び、３班に分かれて活動を実施しました。硯石生産販売組合からの依頼で、地場産業の復興支援の一環として、硯石のスレート磨きの作業もお手伝いしました。

作業終了後は、入浴を済ませてから、民宿（全勝旅館）に帰り、夕食後、全員でふりかえりを実施しました。

【３日目】

９時から、昨日に引き続き、灯籠流しに関する作業と、硯石磨きの作業の続き、キッズスペースの清掃に取り組みました。16時から始まった灯籠流し前に行われる法要にも参加させていただき、その後、地元の皆さんや観光客の人たちとも協力し、手渡しのリレーで灯籠を船に積み込み、灯籠流しが実施されました。

【４日目】

９時半に雄勝の店こ屋街前に集合し、流した灯籠の回収と硯石磨きの作業の続き、キッズスペースの清掃に取り組みました。

作業が終了した後は、昼食前に、地元の神山氏から発災当日のお話を伺いました。

14時から17時まで石巻社会福祉協議会を訪問し、長年お世話になっている阿部氏を始め、発災当時はボランティアとして石巻を訪れ、その後職員となって石巻復興のために尽力している谷氏・金子氏のお話を伺い、質疑応答を行いました。

その後は、入浴後、石巻駅近くで自由時間を作り、各自夕食を取った後、20：30に集合し、

バスの中でふりかえりをしながら京都に向けて出発しました。

【5日目】

6時に起床し、朝食休憩の後、バスの中でクールダウンのふりかえりを行いながら京都に向かい、京都駅と深草キャンパスにて解散しました。

活動報告会

2回目と合同で実施した。(P13)

■参加者の声

- 本当にたくさんのことを感じることが出来ました。他人事でしかなかった東日本大震災について改めて考えること、常々疑問であったボランティアとは何か？を考えたいと思い参加させていただきました。完璧な答えではないけれど、傷を抱えながら進む石巻市の方々、雄勝の方々と関わることで、少なくとも「他人事」ではなくなりました。それと同時に復興というものの難しさも身にしみて分かりました。現地の方の力がもちろん核になっていますが、雄勝を知り、何かしたいと思った時、何か行動することは、小さいが確かに誰かのためになっているということが分かりました。自分を厳しく律して過ごすのは難しいですが、少なくとも、もっと毎日を大事に過ごしていきたいなと思いました。ボランティアについても、体感することで、自分のためでなく、誰かのために何かをする時間がこんなに心地よいものだということも今回分かりました。これからもどんな形にしてもボランティア活動に参加したいと思いました。
- どんな映像を見るより、ニュースでどんな話を聞くよりも、神山さんにしていただいた話で心を締め付けられました。現地の方の「ありがとう」の一言で来た意味があったと嬉しく感じました。

■コーディネーター所感

灯籠流しは、人手を多く必要とする作業です。被災前は、地元の人たちが1つの家庭で3つというような形で灯籠を作り、持ち寄って灯籠流しを実施していたとのことですが、今年は、仮設住宅の皆さんが800個作り、後は、学生を含むボランティアと地元の有志で1000個作りました。人口が減り、高齢化率が60％を超えるこの地域の抱える現状をこの活動を通して体感しました。

地元の僧侶が灯籠流し直前に行われた法要で、「ボランティアの若者がこうしてきてくれるだけで、雄勝が元気づけられる。」と言ってくださいました。また、地元の皆さんが「また、龍大生が来てくれた。」と、昼食時にはスイカやトマトなどの差し入れを頂いたり、地元の方がブログで龍大生の活動を紹介してくれたりと、地元の皆さんは、龍大生のことをたいへん歓迎してくださいました。同じ場所に通い続けることの意味を実感しました。

今回の活動で一番ショックだったのは、出発前などに訪問先の現状などについて説明会を実施し、映像を見てもらったりして、できるだけ視覚的に見えづらくなった被災地について伝える努力をしていたつもりだったのですが、1日目の学生とのふりかえりの中で「被災地であることの実感がもてない。」という声が多数出たことでした。しかし、地元の皆さんとの触れあいと参加者間の話し合いの過程で少しずつ実感を高め、特に、地元の方の「このあたりの風景は一変した。この辺りには家がたくさんあったが、今は更地ばかりだ。灯籠流しは、自分たちに残された唯一の原風景だ」というお話は心に響いたようでした。学生たちはこの言葉をきっかけに、灯籠流しの幻想的な光景に込められている地元の皆さんの深い思いと、被災によって失ったものの大きさに気付き、自分たちが今果たしている役割について考え始めたように見えました。今回の活動ではスケジュールの関係上、いきなり作業から活動に入り、地元の方からお話を聴くということは活動終盤になりました。そのため、なかなか被災地であるということを実感できなかったのかもしれません。しかし、学生だからこその力を発揮できる場は、まだまだあります。『被災を伝え続けること』が難しくなっている中、この復興支援ボランティアを大学として実施する意義は、ますます大きくなると思います。より中身の濃い活動の設計にチャレンジしなければならないと考えています。

〈報告者：竹田　純子
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

| 企 画 名 | 東日本大震災　第2回　復興支援ボランティア　及び　第1回第2回合同報告会 |
|---|---|
| 実施日／場所 | ボランティア：2013年９月27（金）～30日（月）４泊５日　宮城県石巻市<br>報告会（第１回、第２回合同）：2013年10月10日（木）17時30分～19時00分<br>深草キャンパス　21号館101教室 |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター |
| 参加人数 | ボランティア：合計34名（学生31名／引率３名）<br>報告会：約50名（第１回と合同） |

■経緯・目的

今年度２回目の復興支援ボランティアとして、宮城県石巻市雄勝町での活動を実施しました。今、現地で必要とされている活動ができるように、石巻市雄勝総合支所、石巻専修大学など、地元の関係者の方との調整に時間をかけました。

■概　　要

復興支援活動

31名の学生と３名の教職員が参加し、石巻市雄勝地区のスポレクまつりにて活動させていただきました。また、大川小学校跡地の見学や、仮設住宅支援をされている石巻専修大学の山崎ゼミとの交流、復興活動を継続されている石巻ピースボートの方からお話をうかがうプログラムも実施しました。

●活動スケジュール

【１日目】

バスで15時間かけて石巻市に到着、ホテルにて宿泊。

行きの長い道中で、仲間作りのための自己紹介や、被災地での活動の説明を行いました。

【２日目】

多くの子どもたちが亡くなった大川小学校を訪問、慰霊碑の前で祈りをささげました。みな言葉を失い、荒野の中に残された校舎を見つめていました。

石巻ピースボートにて、小林深吾氏より復興活動についての説明を受けました。学生達はみな活発に質問をしていました。

石巻市内の会場にて、石巻専修大学の山崎ゼミと交流、お互いの復興支援活動を報告しました。山崎ゼミは継続して仮設住宅住民の支援活動をされています。８月にはゼミ旅行で龍谷大学を訪れてくださり、学生スタッフや今回のボランティアに参加する学生と事前交流会を行っていました。一緒に石巻市内のまち歩きをして、震災時の様子や、まちの復興状況を聞きました。その後、バスで日和山まで移動。ここは多くの市民が津波をのがれて避難した場所です。山頂からは石巻市が一望でき、散策しておられた市民の方から当時のお話を伺うことができました。まち歩きの最中も、道行く人や商店街の方、犬を散歩させている方が、京都から来た私たちに「よく来てくれたね。」と声をかけてくださり、学生たちはもっとまちの人と話をしたいと希望していました。

最後に石巻専修大学を訪問、2011年度震災フォーラムに参加してくださった坂田学長も私たちに合流し、大学が復興支援活動の拠点となっていた当時のお話をしてくださいました。広いグラウンドは震災当時テント村となり日本全国からボランティアが来て滞在した場所です。

入浴を済ませてから、宿舎に帰り、夕食後、雄勝硯石生産販売組合の高橋頼雄氏から雄勝の被害やこれからの防災についてお話しいただきました。未曽有の災害を生き抜き故郷を取り戻そうと精力的に活動されている高橋氏の話は心に迫るものがあり、みな真剣に聞き入りました。そのあと全員でふりかえりを実施して翌日に備えました。

【３日目】

スポレク祭りが行われる大須小学校にバスで移動してイベントの準備を始めました。会場設営、昼食の豚汁の準備をしながら、続々とやってくるまちの方を元気にあいさつをして迎えました。イベント中は競技の補助、備品の後かた

づけなど皆精力的に動きました。競技はどれも工夫が凝らされており、見ていておもしろいものばかりでした。愛の献血リレーは、チーム８名が、赤い染料を入れた水を、ワンカップですくって、一升瓶に順番に入れていくという競技です。血液にみたてたお酒をワンカップで、男性陣が上手に一升瓶に注いでいくのです。一番盛り上がったのが綱引きでした。イベントの中盤にさしかかるころには競技の手伝いをするだけではなく、「若いの！こっちにきてくれ！」と地域の方から学生を引き抜く声がかかるようになって、真剣に競技に参加していました。まちの人と一緒になって負ければ悔しがり、勝てば手をたたいて喜びあいました。

最後はみなで雄勝音頭を踊り、一つの大きな輪をつくりました。みなさんの思いにどれだけ近づけたかはわかりませんが、学生たちの「微力ながらでも力になりたい、頑張りたい」という気持ちが通じたのではないかと思います。

豚汁、おにぎりの昼食をとり、片付けをすべて完了した後、石巻市雄勝支所職員の牧野輝義氏が自分の被災体験、奥様を亡くされたこと、３人のお子さんを育てる苦労などを話してくださり、想像を絶する体験にみな言葉を失いました。私たちのために辛い話をしてくださる強さ、やさしさに、学生たちは心打たれたことと思います。これからの日本の将来を担う若者に防災の取り組みを継承したいという思いがあってのことだと感じました。

入浴後、夕食をとり、バスの中でふりかえりをしながら京都に向けて出発しました。

【４日目】

バスの中で６時に起床、瀬田キャンパス、京都駅、深草キャンパス、それぞれの学舎で下車し、帰途につきました。

活動報告会

第１回、第２回合同の活動報告会を実施し、学生の感想、体験を、今後復興支援活動に参加したいと考えている学生や、すでに参加していて、現地の今の状況を知りたいと考えている学生たちと共有しました。参加した学生は、かけがえのない体験から多くのものを学ぶことができ、行って良かったと感想を語り合いました。被災地に行ったことにより、自分が今ここでできることがあると考えるようになり、日常が変わったと内的な成長があったことをうかがわせる学生も多く、引率する者としてもうれしい報告会でした。

■参加者の声

- 高校生の時にYoutubeで被災時の動画を見たのですが、その画像を同じような角度から生の現場で見て、鳥肌が立ちました。道には普通に車がたくさん通っていて、これが全部一瞬で飲み込まれると思うと命って何だろうと考えました。それに、動画で見たより、岸から高台までが遠くて、なかなか逃げられる距離じゃないと思いました。住宅地だったところは草原で、そこに住んでいた人のことを思うととても辛かったです。
- スポレクまつりでは、地域の方々が久々に集まるということで、とても楽しそうでよい表情をしているなぁと思った。でも、その笑顔の裏側には、家族や子ども、親戚を亡くした背景などがあるのだと思ったら胸が熱くなった。
- 今回、ボランティアを通して思ったのは、ボランティアは自分が得にいくところだということだ。
- 今回のボランティアに参加して、ただ一緒にいて会話して、今回教えていただいたことを、私たちの地元にいる人たちに伝え、またその人たちが東北に足を運んで…というような連鎖を生んでいくこともボランティアの一つの役割であると感じました。実際に自分の目で見て、雄勝や石巻で出会ったたくさんの方々から聞かせていただいたお話で、メディアを通して知った震災とはまた違った震災の爪跡を知り、考えたことがたくさんありました。
- 五感を使って多くのものに注意を払えば、ここが被災地なのだと痛感させられました。途切れることのない重機の音、行き交う大型トラックの量、不自然な野原、どれをとっても、ここに実際にいなければ気付きません。たくさんの人と出会い、色々な話を聞けましたが、今わたしができる唯一のことだと思うことは、この現状を人に伝えることだと強く感じました。過ぎ行く日々の中で、今でもここは“復興の途上”であり、そこの人たちは多くの困難の中で強く生きていることを、これからの学生生活で伝えていければと深く心に刻

みました。

- 今回の活動で得たものは自分の人生を大きく変えたと思います。明日から自分がどのように思いながら、どのように過ごしていくのかしっかり考えていきます。

■コーディネーター所感

雄勝地区は、震災前は、約5000人が住む海と山に囲まれた自然豊かな地域でしたが、震災により街の中心部がほとんど流されてしまいました。地震の後、避難所に暮らしたり、仮設住宅に移ったり、また、親戚宅に身を寄せたりして多くの方は交流が途絶えているそうです。中には１年ぶりに会う方もいるそうで、このイベントが今後のまちづくり、地域づくりの重要な役割を任っているのです。

この３泊４日のボランティアでは、震災当時、復興支援の拠点となった石巻専修大学や、たくさんの子ども達が亡くなった大川小学校を訪れました。また、石巻市内の日和山に登り、海までの住宅街がすべて流されている景色を見ました。私たちが当たり前と思って過ごしている日常が欠落している被災地で、学生たちは自分自身を見つめ直す機会を与えられます。また、出会った多くの方に温かく迎えていただいたことからわかるように、学生は存在そのものが“希望”であり、“夢”なのではないでしょうか。学生自身が学ぶことができる場であると同時に、彼らが行くことによって現地に元気を与えることができるのです。これからの世界を担う若者に、このことをぜひ、自分の目で見て心で感じてきてほしいと思います。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパス　コーディネーター）〉

---

| 企 画 名 | 東日本大震災　第３回　復興支援ボランティア　及び　第３回報告会 |
|---|---|
| 実施日／場所 | ボランティア：2013年11月15日（金）～18日（月）３泊４日　宮城県石巻市<br>報告会：2013年12月３日（火）17時30分～19時00分<br>瀬田キャンパス　３号館105教室 |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター |
| 参加人数 | ボランティア：合計35名（学生31名／引率４名）<br>報告会：約40名 |

■経緯・目的

今年度３回目の復興支援ボランティアは引き続き宮城県石巻市雄勝町での活動を実施しました。現地の方から『おがつ店こ屋街２周年記念祭』への協力を依頼され、要請に応えた活動を行いました。

■概　　要

復興支援活動

31名の学生と４名の教職員が参加し、石巻市雄勝地区の『おがつ店こ屋街２周年記念祭』で２日間活動しました。会場設営、フィリピン水害の募金受付、抽選会場係、みこし担ぎ、餅まきなどの運営補助と、龍谷大学のブースで、京都の物産販売、喫茶コーナーでの接待、ゲームコーナー、折り紙の匂い袋や念珠作り体験などに取り組みました。また、大川小学校跡地の見学や、町役場職員や硯職人のお話を聴く機会を設けました。

今回の活動にあたり、京都の複数企業の協賛を得て、多くの物品を提供いただきました。また、学生達が事前に企業を訪問し、お茶のおいしい淹れ方、折り紙の折り方を学び、当日に備えました。販売した際の利益で硯製品や海産物を購入し現地に還元、協賛企業へお礼に伺いました。

〈協賛企業名と品名〉
（株）松栄堂：匂い袋
（株）長谷川松壽堂：和紙
（株）一保堂茶舗：ほうじ茶
（株）井筒八ッ橋本舗：八ッ橋、生八ッ橋
（株）西利：漬物
（株）くろちく：和雑貨
（株）井筒法衣店：念珠、念珠ケース

今西製菓（株）：あめ
龍谷大学伊達ゼミ：煎茶「雫」
ありがとうございました。

●活動スケジュール

【1日目】
7：00 深草キャンパス　出発
7：15 JR京都駅　出発
20：00 石巻市着・入浴（銭湯）
22：00 宿（全勝旅館）着・軽食、翌日準備
23：00 就寝

【2日目】
7：00 朝食、移動
8：00 イベント会場到着、会場設営
10：00 おがつ店こ屋街2周年記念祭ボランティア
16：30 片付け、移動、入浴（銭湯）
19：30 宿着、夕食
20：00 町役場職員、硯職人の方よりお話を伺う
21：30 ふりかえり
23：00 就寝

【3日目】
7：00 朝食、移動
8：00 大川小学校見学
10：00 おがつ店こ屋街2周年記念祭ボランティア
17：00 片付け、移動、入浴（銭湯）、夕食
20：00 石巻市発　バスの中でふりかえり
22：00 就寝　高速道路SAにて随時休憩

【4日目】
7：30　瀬田キャンパス着、解散
8：00　京都駅着、解散
8：20　深草キャンパス着、解散

活動報告会

活動終了後、学内に向けた活動報告会を実施し、学生の感想、体験をできるだけたくさんの人と共有する機会を設けました。当日は学生、大学職員含め約40名の参加がありました。ボランティア活動に参加した学生から、被災地でどのような活動を行い、どのような出会いがあったのか、何を見て、聞いて、感じてきたのか、画像を見ながら報告しました。

今回の活動には、復興支援活動に参加するのが2回目、3回目という学生が複数入っており、1回目の活動と比較した上での率直な感想が聞かれました。報告会終了後、活動に参加した学生のみを集めた交流会を実施し、学生の心境の変化などについて、リラックスした雰囲気の中で語る機会を設けました。

■参加者の声

- 昨年に続き2回目の参加でした。今回は後輩達をリードできるように、ボランティアに行く前の準備や企業訪問にも参加させていただきました。昨年出会った方との再会や、新しい出会いを数多く経験できました。
- 震災から復興することがどれだけ大変なことかを実感できました。東北の復興には私たち若い世代の力が必要不可欠だと気づきました。
- 「みんなにこにこしてるけどそれぞれが一生治ることのない傷を負ってるのよ。だから優しくしてもらうとすごく嬉しいし、涙が出てくるのよ」と聞いたとき、自分がしていることが小さくても被災地の人たちには受け取ってもらっているんだと感じたし、もっと何かしたいと思った。雄勝のみなさんの抱える大きな傷を、一瞬でも和らげることができたのではないかと思えた。
- 生きることの難しさを改めて感じました。普段、何不自由なく生きて暮らしている自分にとって、今回参加して一番大きな得たものではないかと思います。東北に何らかの形で関わっていきたいと思いました。
- 今回経験したことを他の人に伝えることが重要になってくると思います。私たち自身が被災地に関心を持ち続けることも大切だと思います。
- 最も学んだことは、「思いが重なる瞬間」の素晴らしさです。被災された方と、支援で来られた方が、皆それぞれの状況や思いを持ちながら一つの空間を創り上げる今回のイベントでは、「人の強さ」や「支え合うことの大切さ」「生きることの素晴らしさ」に何度も出会うことができました。
- 宮城大学や石巻専修大学、淑徳大学の方々と交流できました。何よりも子どもたちの笑顔が非常に眩しく、私を元気にしてくれました。
- 来年も、再来年も、もっと回数を増やして復興ボランティアの募集をしてほしい。自分自身も行きたいし、みんなにもぜひ行ってもらいたい。行かなきゃわからないことばかりなので。

■コーディネーター所感

震災からはや2年8か月が経ち、メディアに取り上げられる機会が急速に減っているにもかかわらず、学生の積極的な参加が見られたこと

は喜ばしいことでした。今回初めて２度目の再参加も受け付けました。志望動機の中に「一年前とどう変わったのか自分の目で確かめたい」「もう一度雄勝の人たちに会いたい」というものがあり、現地の方と学生とが再会を喜びあう姿が印象的でした。初めての学生に一人でも多く参加してほしい反面、継続的な参加を可とすることでより深く被災地とつながりができるため、今後も継続参加可の募集を続けていく方がいいと考えています。

今回の活動は、丸２日間『おがつ店こ屋街２周年祭』での運営補助、京都の企業から提供いただいた物品の販売、喫茶コーナーでの接待などが主でした。京都のお茶とお菓子を提供しながら傾聴する場面では、被災者の方々の気持ちに寄り添い、共感する学生の姿が見られました。学生たちが、見て感じたことをまわりに伝え続けること、遠い京都から思いを馳せること、忘れないでいることが今後も求められていくでしょう。

被災した場所の多くは整地され、震災の傷跡はますます見えづらい状況になっています。刻々と変化する被災地のニーズに合わせ、学生の学びに繋がるプログラムをどう組み立てていくか、コーディネーターに求められていると考えています。

〈報告者：古澤　登美代
（深草キャンパス　コーディネーター）〉

| 企画名 | 東日本大震災　復興支援フォーラム<br>福島に生きる、福島を生きる　～詩の礫（つぶて）、それから～ |
|---|---|
| 実施日／場所 | 2013年12月14日（土）13時30分～16時30分　深草キャンパス22号館101教室 |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO活動センター |
| 参加人数 | 約200名 |

■経緯・目的

震災から２年以上経ち、震災に関する報道が減っていく中、とくに地震、津波、放射能被害に苦しむ福島の問題に焦点を当てて、フォーラムを開催することにしました。講師として、発災６日目からツイッターを通して福島の被害を発信してきた詩人の和合亮一氏をお迎えし、ご自身の詩を通して東日本大震災の被害を語っていただきました。大学内外のたくさんの方に参加いただき、今後も被災地に関心を持ち続けるためのきっかけとなるように学生スタッフと協働してさまざまな取り組みを行いました。

■概　　要

●講師：　和合　亮一氏

1968年福島生まれ。福島市在住。詩人。現代

詩の旗手として、イベントやラジオなどで幅広く活躍。

３月11日、職場で被災。同月16日から始まったツイッターにて福島の状況を発信し続けている。東日本大震災での被災状況をツイッターに綴った『詩の礫』（徳間書店）、『詩ノ黙礼』（新潮社）、『詩の邂逅』（朝日新聞出版）の３部作で広く共感を得る。

●内容

①学生の詩の朗読

学術文化局交響楽団４名の「G線のアリア」の演奏をバックに、ボランティア・NPO活動センターの学生スタッフ８名が和合氏の詩を自分たちで選んで感動的に朗読

②大学の復興支援活動紹介

峰松優丞学生スタッフが３年間の活動をパワーポイントで参加者に紹介。

③和合氏の詩を交えた講演

2011年12月４日の「１万人の第九」で自身の詩「高台へ」を「G線上のアリア」をバックに朗読をされた映像も紹介いただいた。

⑤福島、雄勝の物産展

④学生スタッフとの交流会

高校教諭をされている和合氏は大変気さくに学生と懇談して下さり、自分の学生時代の話を交えながら、学生に今を生きる重要性を熱く語って下さった。皆大喜びであった。

■参加者の声

- 私たちにできることは何かと考えがちだったけれど、最後の詩にあったように「フクシマはわたし」というつながりが一番大切だと感じました。遅くなりましたが今日つながりました。
- 和合氏の話の内容が震災に対する理解を深めてくれた。
- 細々とですが、復興支援にかかわっています。その時、その時、最善と思って行動していますが、もっと別なことが出来たのでは？と考えて悩むことが多々ありました。今日のお話を聴いて悩むこととか、つながろうとする努力が必要なんだと気づきました。

■コーディネーター所感

和合氏のお話は、地震発生当時の生々しい体験から、子どもを放射能から守るために奔走したことや、ツイッターで福島の様子を発信するに至った経緯など、聞く者の心を動かす真に迫ったお話でした。また、多くの人とつながった経験となったという2011年12月４日の「一万人の第九」での「高台へ」の詩の朗読を音楽と映像で紹介いただきました。そして、福島の詩を静かに、強く、大きく、私たちの魂を揺り動かすように、伝えて下さったのです。会場は、和合さんの心と詩により確かにつながり、これからの日本を任う若者の心にその思いは刻まれました。震災から３年が経ちました。一人ひとりがより真剣に考えなくては、風化は止まらないでしょう。ふるさとをあきらめない和合さんの思いを忘れず自分自身のこととしてこれからも歩んでいきたいと思います。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパスコーディネーター）〉

| 企 画 名 | ドキュメンタリー映画「ガレキとラジオ」上映会 |
|---|---|
| 実施日／場所 | 2013年12月６日（金）瀬田キャンパス　13時35分～15時05分<br>深草キャンパス　17時00分～19時00分 |
| 実施主体／運営 | 龍谷大学／ボランティア・NPO 活動センター |
| 参加人数 | 瀬田150名、深草70名 |

■経緯・目的

被災地である南三陸町の臨時ラジオ局員が奔走している様子を１年に渡り追いかけたドキュメンタリー『ガレキとラジオ』の上映会およびエグゼクティブプロデューサー（製作総指揮）の山国秀幸氏（本学経済学部卒業生 1985入学）の講演を実施いたしました。

■参加者の声

- ラジオ局のみなさんも被災者なのに、まちのみなさんを支えようとしている気持ちに涙が出て、素晴らしいと思った。今を大切に生きようと思った。
- 今回の作品を観て、震災に遭った方々が、自分たちにできる何かを全力で行い、他の人を元気づけていく姿はとてもすばらしいと思いました。
- 今回映画を観て、被災地の人たちやFMラジオの人たちはしっかり前を見て生きているんだと思った。今さらかも知れないけど、もっと震災について知って、今どうなっているのか知らなくちゃいけないと思った。
- それぞれ震災で家族が津波に流されたり、家を失ったりと悲しい思いをしているはずなのに、ラジオを通して地域を活性化させようとするチームラジオのみなさんに深く感動しました。

■コーディネーター所感

この映画は、南三陸町で立ち上がった全員素人の小さなラジオ局が起こす奇跡の物語です。被災者が自分の悲しみを乗り越え、「がんばっぺ」と明るく奮闘する姿に、生の悲しみ、人の強さを感じ多くの学生が涙を流していました。たくさんのことを学んだ鑑賞会となりました。

〈報告者：上手　礼子
（瀬田キャンパスコーディネーター）〉